今度は北国街道の旅
64期の街道歩き

昨年秋に東海道の旅を終えたが、やはり、故郷・上田を通る「北国街道の旅」で終わりにしよう、ということになった。

北国街道は中山道追分から善光寺を経て越後高田までをいい、さらに金を佐渡から江戸まで運んだ道でもあるため、佐渡を対岸に控える出雲崎までを北国街道とすることが一般的です。

2017年4月15日、信濃追分駅に集まって旅が始まった。

1日目は浅間おろしに身を縮め、追分原を歩いて小諸宿に向かう。道の途中には、両岸が垂直に削られた深い浸食谷（田切地形）が幾筋もできている。

小諸城外堀にもなっている蛇堀川を渡ったところから小諸宿に入る。与良町、荒町、本町と歩くと、所々に古い商家、旅籠が残っている。小諸宿本陣は表門と問屋場の建物（国重文）が残る。本陣主屋は佐久市の寺に移されていたものが返還され、駅横の公園に移築されている。仙石権兵衛によって建てられた大手門も元の場所に返還されて雄姿を見せている。

この日泊まったホテルのレストランからは、懐古園の三分咲きの桜が見え、お花見も楽しんだ。

2日目は気温20度を超える日照りの中を田中宿に向かう。牧家一里塚の先に雷電の碑が2基並んでいる。古いものは江戸時代に作られたが、破片を持ち帰ると立派な男になれると風評が立ち、破損が著しくなり明治期に新設した。

田中宿は戌の満水（1742年）により壊滅的な被害を受けたため、2キロ先の海野宿が本陣を勤めた。海野宿は用水が宿場中央を流れ、出桁造りと卯建が揚がる家が並び、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

海野宿で待っていた上田市の同期生2人も一緒に大屋駅まで歩いて第1回の旅を終えた。

清水計枝（64期）

北国街道の旅スタート地点近くの追分宿の分去れ（わかれさ）

旅の記録が完成
東海道53次

64期生による東海道53次の旅の記録誌が完成した。会報に毎回報告を載せてくれた清水計枝さんが企画・編集。2013年10月から16年10月まで計18回の旅の記録が多くのカラー写真とともに330ページ余りにわたり収められている。毎回の参加者の名前や、旅に参加した感想も収録している。

東海道53次
旅の記録

念願のネパール旅行
街道歩きグループの有志

64期の街道歩きグループは昨年11月に東海道53次の旅が終わり一区切りとなったため、かねてから念願だったネパール旅行を行うことになった。

きっかけは4年前の第51回関東同窓会の特別講演で宮原巍氏（50期）が1971年に世界で初めてエベレストに最も近いホテル・エベレスト・ビューを建設した思いを美しいヒマラヤの峰々の写真と一緒に発表していただいた時からであったが、ようやく今年3月に有志5人（家族含む）での訪問が実現した。

3月のヒマラヤの気候は日本の秋の程度の予想であったが、ネパール到着の前日に雪が降って真冬の寒さとなっていた。しかし、ホテル・エベレスト・ビュー（3880㍍）に到着した日は運良く快晴となり、青空に白銀のヒマラヤの峰々がくっきりと突き出してその美しさに何度も息を飲んだ。

参加メンバーのうち3人は初めてのネパール旅行であり、一生に一度は経験したいネパール（神々が住む山の眺望や仏教の故郷など）を体験できた。残りの2人は2回目のネパールであり、今回はその後の変化（2015年のネパール大地震の影響や首都カトマンズの自動車の増加など）についても確認できた。

旅行の最終日には、思いがけず宮原氏からカトマンズの隣市にあるご自宅での夕食会にご招待をいただき、そしてその日はたまたま宮原氏の83歳のお誕生日だったため、ご家族の皆さんとご一緒にお祝いができました。宮原氏もアコーディオンで懐かしい曲を演奏してもてなしてくださり、一同感謝、感激の夕食会でした。

柳澤信義（64期）

最終日に宮原氏のご自宅で夕食会